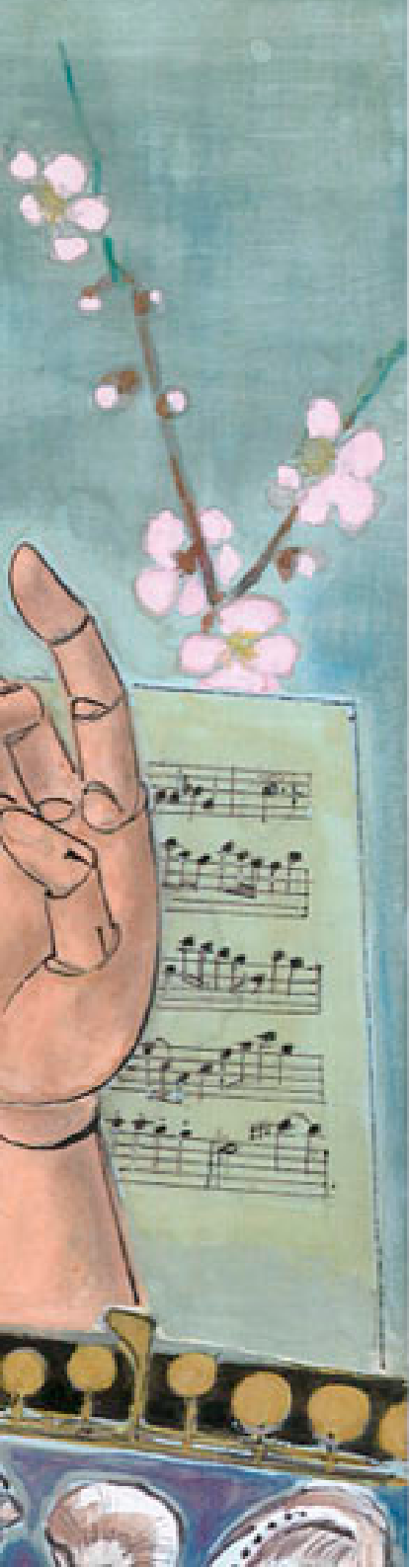


平成二十四年八月一日発行（毎月一回）日榮社 通巻九七二号

火星

平成二十四年八月号



七曜抄 (八)

山尾玉藻

白蓮のうしろの紅蓮くづれけり

夫は

癌告知受けし白扇膝に握る

ふぐりに手置いて夫寐る青葉木菟

夫留守のはえとりぐもを頼りとす

病衣並び窓の白雨を見てゐたり
帰る背へ礼など言はれたる日傘
病院の裏の向日葵かなしめり
土用芽のからくれなゐに願ひけり
すぐそこに潦ある暑さかな
眩きつ人引き返す日の盛

春立つや 飯塚 系子

春立つや力士の手形真くれなる
義仲寺の框越えきし涅槃西風
八荒や盆栽松のうらおもて
車椅子用のスロープ沈丁花
夕朧かな南座の浅葱幕
をん鶏に柵めん鶏に花はこべ
洞ヶ峠越えてゆきたる花吹雪
鳥羽口へつづく京の花ぐもり

特別作品

わらぢ売る養花天なる詣道
鳴き砂を揉んで弾きし五月かな
母の間の若葉明りの刺繡糸
白南風や跨線橋より海みえて
耳^み成^{みな}山^しへ通ひ路ありし蚊喰鳥
てつぺんに秋暑の残る鼻柱
みづうみを平らに牧を閉ぢにけり

太白星

舟棹の巖ひと突き夏来る
老鶯や昼近き水使ひゐて
鶉草の咲ける島より手紙来る
日蝕用めがね真つ暗アマリリス
青葉風城下にパンの発酵す
能舞台の床下に風芒種かな
夏鴨に水豊かなり野面積

柳生千枝子

浜口高子

紫蘇揉んで揉んで日暮の濃かりけり
海鳴りのつづきに鹿尾菜干されあり
噴水や女くるりと髪とめし
衣更へて櫂の影のくはしかり
月光に拾ひし実梅ほのぬくし
着水の鴨すぐ発ちし薄暑かな
デカンショの地に早苗風踏みにけり

火星作品

山尾玉藻選

日を返す色となりけり柿若葉
八幡大山文子

妹の猫に嫌はれぬ
汁

水無月の多羅葉仰ぐ
男山

叡山に月の落ちゆく
梅雨鯨

梅雨深し大法廷の覗き
窓

墓鳴いて室生寺の闇ひろ
ごりぬ
天谷翔子

をみなごの肱とがりぬる
夏はじめ

突堤の暮れ残りぬる
夏つばめ

命抜けたる玉虫の光
かな

古井戸の底ひより生れ
黒揚羽

薬日の闇へ振らるる
神楽鈴
坂口夫佐子

頓宮の回廊駆くるは
たた神

稻荷社のペンキ塗り
たて花は葉に

袖 矢 晋 風 山 金 街 宵 十 宇 猫 礼 耳 座 花 棕 竹
口 車 山 音 影 環 に 宮 万 治 の か な り は 欄 皮
に を の に の の 日 向 の の の の の の の の の の
高^た 風 の 僧 の 近 蝕 向 の お の の の の の の の の の の
円^か の の の あ ぼ く 船 船 八 の の の の の の の の の の
山^ま は の の け ぼ う た の の の の の の の の の の
の な れ る む け て ん の の の の の の の の の の
の 風 ぬ 新 し へ に の の の の の の の の の の
白 峡 の 茶 の 水 散 り を 易 金 屑 白 牡 水 梅 雨 近 け や 茅 花 風 練 供 養 大 和 郡 山 城 孝 子
牡 丹 家 な 子 り む し 魚 丹 渉 る し 丹 澤 鱈

吹田田中文治

神戸深澤鱈

大和郡山城孝子

恒星圈

蘭定かず子

朝がたの夏うぐひすにまた眠る
燕の子椋の空をよるこびぬ
枇杷の実へ伸ばしし肘をまぶしめる
ユトリロを見てきし上布風に吊る
空腹の夫が西日を帰りきし

山本耀子

渡辺数子

病葉を乗せ白川の水はやし
花あやめ母の衿もとゆるびをり
葉桜や紙縫りで綴ぢし祖父の文
青嵐の木道に夫見失ふ
修道院へ男消えたる青葉闇

八十の貌あめんぼの水に揺れ
懐に挿す笛袋星涼し
正面の席空いてゐる新樹の夜
青梅挽ぐ少年肩を尖らしぬ
城堡に戻してやりぬ蝸牛

米澤光子

渡邊美保

夫の字の古き苗札たうがらし
衣更への腕にのこりし時計かな
外濠の由緒正しき蚊を打てり
ヨードチンキ塗つてやらうか燕の子
指先までが天道虫の滑走路

立夏の川の日本海へと迸る
河口へと低く飛ぶ鳶夏はじめ
藪肉桂の若葉匂へりくもりぞら
豆本の表紙貼る指みどりさす
いちにちをぼんやり過ごす栗の花

獅子座

山尾玉藻推薦

川端俊雄

蚊一匹に不眠の呪詛を続けをり
緑蔭に停まりしままの縄電車
月の夜を目覚めてゐたる親燕
父の日や少し離れて子の座る

田中文治

明易の壁に影する蒸籠の湯気
矢が的を外れたる音日の盛
八十八夜釣鐘型の砂糖菓子
糸とんぼ風止む刻のありにけり

藤田素子

風と風追ひかけあへる緑かな
武者人形の店先を犬急ぎ過ぐ
万緑やケープル後ろ向きに発つ
花も葉も降り来八十八夜かな

西村節子

藻刈鎌下げし男の遠目せる
鍵善の干菓子つまめり更衣
片蔭の水に漬けある砥石かな
草笛や大極殿の丹の柱

涼野海音

傘さして蝌蚪を見てゐる双子かな
寝転んで広き額や揚雲雀
春惜しみけり灯台は雲の中
トラツクの荷台に犬や麦の秋

福本郁子

実桜や観覧車の声ふりきたる
不揃ひのざぶとん並べ牡丹寺
しまうまのしま動かざる薄暑かな
山荘にランプ灯りし栗の花

西畑敦子

金魚田に白雲あふる端午かな
富士の峰の遥かに見ゆる更衣
夏蝶のたかみに纏れそれつきり
剥落の左右の大^{おとど}臣の影涼し